

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

「科学者は、科学でなんでも解決できると傲おごっている」と言う人がいるけれど、それは、その人が勝手に思い込んでいる印象である。(A)、科学ほど「謙虚」なものはないア。ものごとを少しずつ確かめながら進んでいる科学の基本姿勢は、傍目はためには、樂觀ではなく悲観である。そこまで慎重になる必要があるのか、と思えるほどだ。

ちよつとした質問に対しても、「まあ、だいたいそうですね」と割り切つて答えることができイないのが、科学者である。それは、少しでも例外が認められるなら、僅かでも違う可能性が考えられるならば、肯定①することはできないという姿勢であり、なによりも謙虚さの表れといつて良い。

では、普通の人が、科学的であるためにはどうすれば良いだろう。

(B) 科学から自分を無理に遠ざけウないこと。数字を聞いても耳を塞ふさがず、その数字の大きさをイメージしてみる。単位がわからないければ、それを問うこと。第一段階としてはこんな簡単なことで充分だと思う。

さらには、ものごとの判断を少ないデータだけで行わエないこと。観察されたものを吟味すること。勝手に想像して決めつけないこと。これには、自分自身の判断が、どんな理由によってなされているのかを再認識する必要があるだろう。理由もなく直感的な印象だけで判断していな

いだろうか、と疑つてみた方が良い。

「スコットランドの羊」という有名なジョークがある。

天文学者と物理学者と数学者の3人が、スコットランドで鉄道に乗っていた。すると、窓から草原にいる1匹の黒い羊が見えた。

天文学者がこう呟つぶやく。「スコットランドの羊は黒い」

それを聞いて、物理学者が言った。「スコットランドには、少なくとも1匹の黒い羊がいる」

すると、数学者がこう言った。「スコットランドには、少なくとも1匹の羊がいて、その羊の少なくとも片面は黒い」

僕なら、ここに、子供を1人登場させ、最後にこう言わせたいところだ。

子供「あれは本当に羊なの？」

このように、人間は大人になると(たとえ、科学者であっても)、自分が観察したものから、ついつい「勝手に」決めつけようとする。数々の疑問をスキップして、結論へジャンプしてしまうのだ。経験を積み重ねるほど、むしろこのジャンプは頻繁ひんぱんになるし、また距離も遠くなるようだ。たいていの場合は、その着地点は正解であり、結果的にジャンプによつて正解にいち早く到達できる。正解を早く見出すことが、社会で生きていくうえでは重要視されるので、自然にみんながジャンプするようになるのだ。

しかし、「科学」は、そういった「見切り」のジャンプを原則として許

さない。一步一段階を踏み、みんなで確かめながら、あらゆる疑問をぶつけ、それらをとことく解決しなければ、前に進むことができない。それが科学というものの仕組みであり、そのルールが「科学的」という意味なのだ。

したがって、個人においても、科学的であるためには、あらゆるものを疑い、常に「本当にそうなのか？」と自問することが大切である。

当然ながら、「そんなに疑ってばかりいたら、できるものもできなくなってしまう」という意見が出るだろう。僕だって、そんなにいつもいつも、なにもかもすべてを疑っているわけではない。たとえば、食卓に出された料理は、それが何なのか知らずに食べているし、本を読むときだって、出てきた固有名詞をいちいち調べたりはしない。前者は、「まあ、美味しければなんだって良い」とか、そんな割り切りであるし、後者は、「^{おい}それを詳しく知ることに、大した価値を感じない」という思い込みによるものだろう。

社会で生きていくためには、この種の「省略」が不可欠ではある。また、他者が関わるような場合には、あまり疑ってばかりいると不信感を抱かれる。「この人、ちょっとおかしいんじゃない？」と（C）だろう。他者にそういう悪い印象を与えることは、自分にとって不リエキになることもあるから注意が必要だ。

ただ、重要なのは、自分がそれを割り切っている、決めつけている、と意識していることだ。「まあ、これくらいは、流しておこう」と思えば

良い。沢山のものを流す必要があるけれど、流しているという自覚があれば、「あ、これは、ちょっと吟味したいな」と感じるものがときどき現れる。そのときだけ、疑えば良い。最初から、流されることを完全に許容し、自覚を忘れてしまうと、こういった疑問を見逃すことになるだろう。

（森博嗣^{ひろし}「科学的とはどういう意味か」より）